書物逍遥

小野塚知二

適切な時期に良い本と出会う

一九八〇年のわたしは混迷の淵に沈んでいた。いや、落ち零れていたという方が正確かもしれない。研究者を志してはいたものの、自分の研究は思うとおりに進まず、頭の中は正体不明の妄想が渦巻くばかりで、意味のある文章を紡ぎ出すことができなかった。

夏休みに入る直前だったろうか、先輩や友人たちの間で藤瀬浩司『資本主義世界の成立』（ミネルヴァ書房）が話題になり、わたしも早速買い求めた。証拠に裏付けられて論理明晰な内容は水のようにいくらでも頭に入った。大事だと思うところに赤鉛筆で線を引くとどの頁も真っ赤になったが、同時に、わたしにしては珍しく、ノートも取りながら読んだので、証拠と論理と、それから特徴的な言葉遣いとが組になってするすると飲み込めた。

方向感を喪っていたわたしにとって、本書は格好の磁針と六分儀の役割を果たしてくれた。いわゆる大塚史学（比較経済史学）は資本主義発達史の国別の型を認識枠組として重視していたが、著者はそれを踏まえながらも、「資本主義の世界体制」という観点から、中心資本主義諸国、周辺資本主義諸国、周辺従属地域の三重構造で、英国産業革命から第一次世界大戦前にいたる時期（「長い一九世紀」に相当）の世界の動態（「同調化」）を、政治的・社会的にも綺麗に提示してみせた。

この頃、産業革命から二〇世紀までを俯瞰できるのはホブズボームの *Industry and Empire* くらいしかなく、苦労して読んでいたところだったので、本書には本当に助けられた。日本語でもすでに産業革命以降を扱う西洋経済史の書物は講座も含めていくつかあったが、いずれもわたしの混迷を深めるばかりであった。

本書はわたしを混迷から救い出してくれただけでなく、世の中には良い本と、普通の本と、よろしくない本の三種類があることも教えてくれた。その頃のわたしは、数多の第三の本たちに惑溺していたのであった。そのことに気付くには良い本に巡り会わなければならなかった。さらに良い本や論文を書く研究者を見付け出して、彼らを正確に追跡することが重要なのだ。一九八一年春に刊行された吉岡昭彦『近代イギリス経済史』（岩波書店）も研ぎ澄まされた方法の威力を教えてくれた。また篠原一『ヨーロッパの政治――歴史政治学試論』（東京大学出版会、一九八六年）は若き日のわたしに解くべき問いの立て方を示してくれた。

むろん、それらも金科玉条ではないから批判は免れないし、史料と方法の両面で刷新されなければならないが（拙編著『第一次世界大戦開戦原因の再検討――国際分業と民衆心理』岩波書店、二〇一四年を参照されたい）、適切な時期に良い本と出会うことは研究者の一生を決めるといっても過言ではない。そんな本を一回くらいは書いてみたいと思う。能力と運と出版社と読者に恵まれればの話である。

（東京大学特命教授）